

「廣瀨淡窓 咸宜園と日本文化」を読む

土屋 博

文語日誌（平成二十八年五月三十日）

中島市三郎著「廣瀨淡窓 咸宜園と日本文化」（第一出版、昭和十七年刊、定價二圓五十錢）を東京古書會館（神田小川町）の「新宿展」にて發見し購入す。中島氏は日田出身の高等小學校校長にて、淡窓研究の第一人者なり。前著「教聖・廣瀨淡窓の研究」（昭和十年刊）の姊妹篇なれば、直ちに讀了す。

咸宜園と明治學制の關係につきては前著に詳述せらるれど、本書にては、咸宜園と學習院との深き關係を説く。七卿落ちの後、京都學習院の危機を救ひて講義を繼續したるは、實に咸宜園出身の劉君鳳先生（劉氏の祖先は後漢の靈帝より出でも、その後原田となり古賀となり合谷となり、その後再び劉姓に復す。）なりき。恐れ多くも 明治天皇に最初の御進講を申し上げたるも劉先生なり。明治二年劉先生病歿後、後を繼ぎたるは廣瀨青村先生（淡窓の養子）にて、東京學習院の基礎をも鞏固にせしとぞ。青村先生の弟子に西園寺公望あり、「立命館」の命名は青村先生による。また青村先生、或る時請はれて三條公の茶室を「雨後軒」と名附く。理由を尋ねられ「狭くて動けん」と答へ、一同哄笑せし由。咸宜園關係者の時の権力者への影響は計り知れず。伊藤博文總理は地方官會議を司會する東京府知事松田道之の手際の良さに痛く感嘆したり。松田も亦咸宜園の出身者なり。更にのちに總理大臣となる清浦奎吾も咸宜園にて都講を務めたる經驗を存分にその職務に活かせり。

また、咸宜園出身者は全国各地に及ぶ自己の故郷に大歸し、家塾を開き、咸宜園同様の規約、月旦評等を設けたり。中島氏曰く、「咸宜園は今日の師範學校や高師、文理大學と同様なる役目を果たしてゐた」と。

咸宜園の日本の宗教界に及ぼしたる影響も頗る大きく、咸宜園入門者約五千人の大半は僧侶なり。伊豫よりの咸宜園への入門者を例にとらば、五十五人中、僧侶が二十五人を占め、その殆どは禪宗なり。僧侶に次いで多きは醫師の子弟にて十數人。入門年齢は十五歳（元服の歳）を最低とし、最高は二十八歳なりて、大部分が十八歳か二十一、二の青年。（十九歳の入門の稀なるは厄年の關係。）

文政元年十一月、頼山陽の淡窓訪問時の模様は興味深し。この時山陽三十九歳、淡窓三十七歳なり。山陽、九州各地巡遊を語るに、淡窓忽ち筆を走らせ、韻を踏みたる七言古詩を立ちどころに作り上ぐ。その状恰も名記者の新聞原稿を書くと同様の速さなり。

日田に傳はる噂あり。何故頼山陽は慌てて日田を去りたるや。何となれば、詩の競作に堪へざるが爲なり。山陽、一所懸命に同韻の文字を探し求めむも、雪隠に祕藏の「詩韻含英」を取り落とし、やむを得ず早期の歸還を餘儀なくせられたりや。後に汲取り分厚き小冊子を得。水にて洗ひ清むるに「頼久太郎」とこそ墨痕鮮やかなりけれ。

淡窓の詩作能力の高さに改めて感心するとともに、大の負け嫌ひの山陽の慌てぶり、眼前に浮かぶ心地こそすれ。

（平成二十八年六月十四日受附）